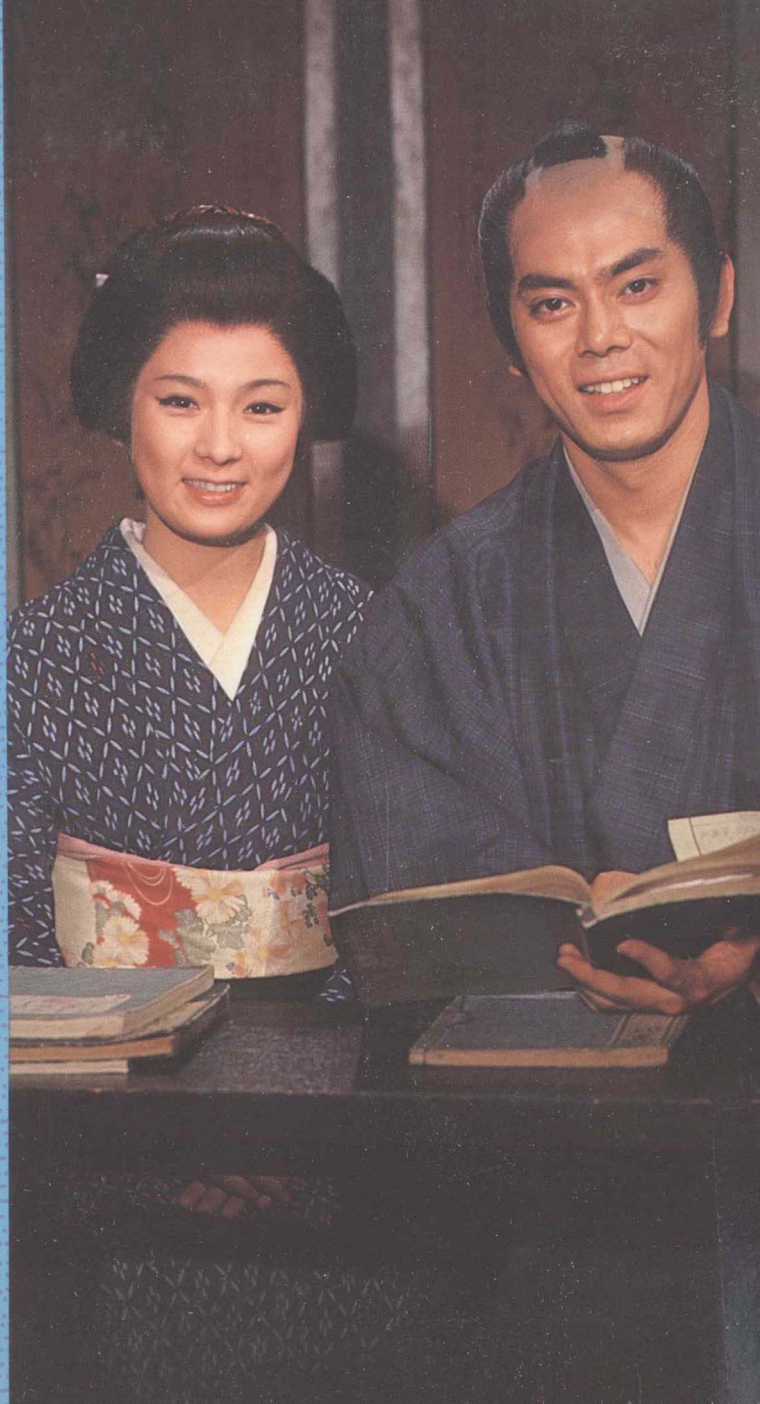


夫婦ふりそり
(下)

横光 晃



横光 晃（よこみつ あきら）

札幌市出身。

札幌放送劇団，NHK 札幌放送局専属作家を経て，現在東京において放送作家を主業とする。

主な執筆 「地底」

「魚住少尉命中」
「オランダおいね」
「きれいはいきたない」
「薩摩おごじょ」
「愛さずにはいられない」
「情炎・遙かなる愛」など。

夫婦ようそろ（下）

1978年7月15日 初版発行

著 者——横光 晃

発行者——吉田 稔

発行所——株式会社ティピーエス・ブリタニカ

東京都千代田区三番町28番地1 秀和三番町ビル

郵便番号102 電話（03）230-0311

振替東京1-131334

印 刷——祥文堂印刷所

製 本——小高製本

©Akira Yokomitsu, 1978

0093-114002-4968

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

夫婦
ようそろ

(下)

横光
晃

TSUNAMI

目次

第十二章	あさき夢みし	5
第十三章	砂丘の女	29
第十四章	忍びよる恋	47
第十五章	別れなければ	72
第十六章	母と子と母	93
第十七章	ゆれうごく日々	115
第十八章	炎の中へ	138
第十九章	横浜弁天通り	160
第二十章	生と死と恋	182
第二十一章	風去りぬ	215
第二十二章	寄りそういのち	240

TBSテレビ系ドラマ「夫婦ようそろ」より

第十二章 あさき夢みし

——早く両親に会いたい。

正直のところ、お志乃の胸のうちは、そんな思いでいっぱいである。なにしろ四年ぶりで実家へ帰るのだから、彼女がそわそわするのも無理はなかった。

外桜田にある南部藩上屋敷のお長屋——ここが新居になるのだが——に入ると、あいさつ回りもそこそこに、彼女は夫の政藏をせきたてて、鉄砲洲の家へ急いだ。

あとになって考えてみれば、それが世間でいう虫の知らせ、というものなのかもしれない。

お志乃が両親の元氣な姿を見て、娘のようににはしゃいだ気分になっていた折、湯島に使いにいった水夫の長七が、不吉な知らせをもつてもどってきたのである。

昨日まで元氣だった安太郎が、今朝になって突然激しい嘔吐と下痢に襲われ、ばったり寝込んでしまった、というのだ。

たった数時間で、安太郎の顔は別人のようにやせこけてしまったという。

それほどひどい症状なのに、せっかく呼びにやった医者は、彼を一目見るなりしりごみして、ろくに手当てもせずに帰ったというのである。

「長七さん、あんたが行ったとき、義兄さんはどんな様子だった？」

今までの華やいだ空気が、一転して重苦しい雰囲気になったなかで、政蔵が口を開いた。医者の経験をもつ彼は、長七の話のなから何かをかぎつけたらしい。

「へえ、時々苦しそうに吐いておりました。おかみさんがおろおろしながら、背中をさすったりして」

「どんなものを吐いていた？」

「それがはっきりとは見ませんでした、白い米のとぎ汁のようなものだったと思います」

「そうか、そいつはただの腹痛ではないな」

政蔵のつぶやきを耳にしたお志乃が、

「あなた……」

不安そうに問いかける。

「とにかく、帰国のあいさつかたがた、見舞いに行ってみよう」

「香野さん、せがれの病気は？」

ひょっとすると、はやり病のコロナではないか、そんな危惧が仁右衛門の頭をかすめたのだ。コロナというのは、今でいうコレラのこと、当時は三日コロナといわれた。早いものなら罹病して数時間、遅いものでも三日以内には死ぬといわれたところから、この名前がついた。

安政五年という年は、このコロナが猖蹶をきわめた年で、七月から九月のピーク時には、江戸の各寺院で取扱った死亡者の総数は二十七万人にも達したといわれている。それで次から次が運ばれてくるので、しまいには埋葬が間に合わなくなり、たる詰めにしてそのまま海へ流したほどだった。

お志乃たちが江戸へ着いた時分は、コロナのうわさはあるにはあったが、まだそれほどの猛威を振るっていなかったのである。

「いや、そんなに心配することはないでしょう。陽気が陽気ですから、何かわるいものにも当たったのだと思います。生ものは特に腐りやすい時期ですからね」

コロナの猛毒は生水、生ものにひそんでいるものだ。長七から聞いた限りでは、どうも安太郎はコロナの疑いが濃厚である。手当てさえ遅れなければなんとかなると、政蔵は顔には出さなかったが、内心ひどくあせっていた。

久しぶりで見る安太郎は、長七が言ったとおり、青黒くやせこけ、夏のようなばか陽気だとい
うのに、上掛けを何枚も掛け、床の中で震えていた。

それでもお志乃の顔を見ると、少し元気をとりもどしたのか、

「こっちはひと足先に三社祭りさ。朝っぱらからピーピードンドン、おかげで腹ん中あ、きれいに大掃除できたよ」

冗談を言って笑った。

政蔵はすぐに診察に取り掛かった。

——コロリはその症状、吐瀉としゃ腹痛、総身微冷、面貌たちまち変じ、脈絶煩悶はなはだしきは人事をしらず、朝に発して夕に死す——

と、医書にあるが、そのとおりの症状だったのである。

朝から激しく苦しみぬいたあとの一時的な小康状態が、彼に軽口をたたかせたのだろう。

病状はかなり進行していた。コロリは予防によってある程度は防げたが、いったん罹病した場合、蘭方でも残念ながら治療する方法はなかった。

からしの湿布をしたり、煎茶に梅干しを浸したものを飲ませたり、政蔵は蘭方、漢方を問わず、およそそれが効き目があるという療法をひととおり試してみたが、だめだった。

安太郎の衰弱はひどくなるばかり、日が落ちるころは、時々、ひどいけいれんに襲われ舌もつれだした。

危篤の知らせで肉親たちが駆けつける。深川からは仙之助と文字繁がやってきたが、病人を見てもまだ信ぜられない顔つきである。

「なんだなんだ、たかが食当たりぐらいで、情けねえつらをするな。お前さん、まさかかわいい女房と子供をおいて、お先に三途の川を渡ろうなんて大それたりょうけんをもってるわけじゃねえだろうな」

まくら元にあぐらをかき、仙之助は瀕死の安太郎に活を入れる。それが効いたのか、半ば意識を失っていた彼が、ふと目を開けて政蔵を見た。

「あんたには、いろいろ世話になった」

もつれる舌をやっと動かして、そう言った。

「なんです、義兄さん、いまさら他人行儀みたいなことを」

「いや、いいんだよ、おれにはわかってるんだ、自分の寿命のこと……気ままに暮らした人生だった。お志乃、どこにいる、顔を見せてくれ」

「ここよ、兄さん。しっかりして」

お志乃がひざを乗り出して、氷のように冷たい安太郎の手をしっかりと握った。

「お志乃、政蔵さんの夢はお志乃の夢だったな。二人して上手に紡いでいけよ、これからの人生を。おれの分まで長生きして」

「何を言うの、兄さん。お弓さんのためにも頑張ってちょうだい」

安太郎は軽くうなずいたようである。

「お弓、筆と紙……ちょっと書き取ってくれ」

自分で書き取る力はもはやなかった。目を真っ赤に泣きはらした弓が、言われるままに、急いで筆を取った。

「一首浮かんだ……面白き綱渡りかな人の世は、いま腑に落ちたコロリ転げて」

だれも口に出さなかったが、彼自身、死病のコロリにかかったことを、とうに悟っていたのだ。

「あんまりうまくないな、辞世の歌にしては。しかし頭がボーッとして、上手に作れないんだ。もういかん……」

「安太郎！」

母親の豊が声をつまらせる。

「お父っつあん、おっ母さん。先に行っちゃうなんて、おれは最後まで親不幸だった。許してく

ださい」

「安太郎、弱気になるなっ」

「兄さん、治るわよ、きつと治る！」

必死に励ます両親たちに、

「お弓と定太郎のこと、頼みます」

最後にひと言いい残して、安太郎は口を半ば開いたまま意識を失った。三十三の短い生涯を、彼は慌ただしく開じたのである。

江戸に帰り着いたその日に、いちばんのよき理解者であった兄の安太郎を失ったお志乃のショックは大きかった。

しかし、生きている者にとって、人生はあくまで厳しい。いつまでも悲しみに打ち沈んでいるわけにはいかなかった。あとに残された母と子の中で、彼女も磯屋の身内の一人として、頭を悩まさなければならなかったのである。

初七日がすんでから数日後に、お志乃は左次郎に呼ばれて磯屋へ出掛けた。やはり弓の身の振り方についての相談だった。

弓と子供の定太郎を磯屋に引き取ったほうがいいか、それとも今までどおり湯島に住まわせるか、磯屋のほうの意見を取りまとめておこうというのである。

仁右衛門夫婦は、母子二人のわび住まいでは見るにしのびないから、この際、家へ引き取ったほうがいい、というのだった。

「しかしね、お父つつあんの優しい気持はわかるけど、お弓さんのほうじゃどうなるのかな、ひょっとして有り難迷惑じゃありませんか」

苦労人のような顔をして、左次郎が言う。

「なぜ」

「だって、今まで兄貴と子供の三人でのんびりやってきた人ですよ、急にしゅうと夫婦や、義理の兄弟夫婦に囲まれて暮らすとなると、こりゃ窮屈ですからね」

「家族が増えると、おかずさんが大変ね」

豊が嫁のかずに気を遣った。

「いいえ、私はお話相手ができるから別に」

「かずがどっちつかずの返事をする。」

「やっぱり、今までどおり、湯島の家に住んでもらったほうがいいんじゃないんですか」

左次郎はそう言い、意見を求めるようにお志乃へ目をやった。

「それはちょっと、ね」

と、お志乃が小首をかしげる。今日は義姉の弓も来るというので、黒っぽいお召を着てきた。自分では気が付かないかもしれないが、いつの間にか、若奥様振りが板についていた。

「反対かい」

「母子二人で別居させるといふのは、かえって冷たいんじゃないかしら。お弓義姉さんが少々窮屈な思いをするにしても、今は、こっちに來たほうがいいと私は思うのよ」

「それはどうということなんだ」

「窮屈でもなんでも、今は、まわりにたくさんいてあげなきゃあ」

「寂しいってわけか」

「そうよ。このまま、兄さんの亡くなった家に定太郎ちゃんと二人きりでいたら、寂しくて悲しくて、自分から死神のところへ飛び込んでいくなんてことにもなりかねないわ。もし私があの人の立場だったら、そんなになるかもしれない……」

まさか、と左次郎の妻のかずが笑ったが、仁右衛門も豊もお志乃の言葉にうなずいた。

「そうですよ、もしそんなことになったらどうします。有り難迷惑だらうなんて言ってる場合じ

やないんだよ」

いっになく強い口調で言う豊に、我の強い左次郎もつい言い負けて、

「わかりました。お好きなようにしてください」

多少不興げな感じはしたが、ともかく同意したのである。

「これでお弓義姉さんの身の振り方も決まったわけね」

ホッとして、お志乃が言うのと、

「まだ一つ大事なことが残っているんだ」

と、左次郎が待ったをかけた。

「こんなこと、あんまり言いたくなかったんですが、あとあとめたりすると、いやなんでね」
意味ありげに切り出した。

「なんの話だ」

左次郎の性格を知っているだけに、またしちめんどくさいことを持ち出したのと、仁右衛門は思った。

「実はね、跡目相続のことなんですがね。私の跡を継いで礒屋の三代目になるのは、私の子供の利平だってことをここではっきり認めてもらいたいんですよ。私が礒屋の当主なんですから、私

の子が跡をとるのは当たり前のことなんでしょうけどね」

左次郎にとっては、弓の身の振り方よりも跡目相続のほうが重大な事柄だったかもしれない。そのことで、証人としてわざわざお志乃を呼んだのかもしれない。

「何かと思ったら、そんな先の先の話を」

「いや、お父つつあん、いざこざというのは、どういうきっかけで起こるかわかりませんからね。お弓さんをどうでも引き取りたいとおっしゃるんですたら、この際、はっきりしておかないと」
聞き直って、左次郎が大きな声を出したとき、喪服姿の弓が入ってきた。無論、彼の声は聞こえてはいるはずだ。

「どうぞ私たちのことでしたら、ご心配なさらないください」

もと深川で左様をとっていただけあって、しっかりした口を利く。

「私、こちらにごめいわくのかかるようなことをしたら、亡くなったうちの人に申し訳が立ちません。ですからこれまでどおりに……」

「待ちなさい」

お弓をさえぎって、仁右衛門は左次郎へ顔を向けた。とがめるような表情になっていた。

「お前が言い出すまで、わしは跡目のことなど考えもしなかった。が、ま、いい。よし、磯屋を